

(二〇一五年 第一五回黄順元文学賞 最終候補作)

クオン・スンチャンと善良な人たち

イ・ギホ

(辻本武 訳)

私はその奇妙な男と初めて出会ったのは昨年夏、空梅雨が二週間以上続いた七月初旬の木曜日の深夜十二時頃だった。

梅雨はどこかに行ってしまったのか。

私はその日の晩も、自分が住んでいるアパート団地の正門横の小さなビアホールに座って、空しい独り言をつぶやき、そしてまたいつもの癖で髪を掻き上げながら焼酎で割った生ビールをちびりちびりと飲んでいた。ビアホールの窓の外には、サウナの広告ネオンのような街灯が一つ立っている。その他には、誰もいない公衆電話ボックスと暗闇に沈む道路の向こう側の丘陵が目に入るだけである。通りには往来する人が一人もおらず、四つのテーブルが全てのこのビアホールには、四〇代中ごろの女店主と私のたった二人だけだった。壁掛けの扇風機が羽根を回して風を送るのだが、その扇風機が私の方に向くたびに、私は不快になって頭が下に垂れ、顔が不機嫌に

なっていく。

そのころ私は原因不明の無力症にかかり、一年以上も小説一編、エッセイ一遍すら書くことができない状態だった。それは私には初めての経験で、癩癩持ちのように何度もこぶしを握りしめて机の端や椅子の肘掛を拳骨でどンドンと叩くのだが、そうやると何故かしら本当に腹が立つてくるのであった。私は自分でもなぜ腹を立てているのかも分からず、だから腹を立てていることを周囲の人たちに気付かれないように、何度も深呼吸をした。このように一日を過ごして帰宅すると、全身から熱が出ており、肘とふくらはぎが痛くなっている。何かを書いてみようかとパソコンのファイルを開けると、点滅するカーソルが画面の下へ、さらにモニターの外に飛び出して部屋の床にまでほとんど落ちるような錯覚に陥る。私は手足の関節の折れたマネキン人形のように椅子にぐったりとなつて座り込み、そのまま寝入ってしまうことがしょっちゅうであった。

たった一度、自分が腹を立てているのを人に見られしまったことがあった。私は八年間、G市にある大学で教員として働いてきてきたのだが、七年目の時に同期の人たちと一緒に副教授に昇進し、学科の講義だけでなく学校内のあれやこれやの委員会とTFチーム、教授協議会や学生相談センター運営委員のような仕事も同時に引き受けていた。それは同年輩の教授ならば、大多数がこのようなことをせねばならない仕事だから、特に不満はなかった。私が今何をしているのかと思ひながらエクセル・ファイルに最近三年間の図書購入費の増減状況や、専任教員の講義担当比率などの表を作成する。しかしこのようにエクセルに数字を打ち込んでいくと、私は今一体何

をしているのか、などという邪念は忘れることができた。完全に数字に没頭するからである。こういう仕事をしている限りは、腹を立てるということはなかった。

会議が多いとそれだけその後の会食も多くなるが、その日がそうだった。教育部（日本の文部科学省に相当）が施行する事業に申請書を出すために、会議と書類の検討が夏休みの間ずっと続いてきた時期だった。弁当を食べて夜の十時によく会議が終わろうとする時に、大学の教務部長が私の腕をそつと掴んだ。「イさん、一杯やらなきやいけないね。家に帰って誰もいないでしょ？」私は素直に教務部長にうなずいた。私以外に若い教授二人が教務部長の一行に加わった。そして学校の近所にあるおでん屋の前で、問題が起きた。「ここに行くか。」教務部長がまた私の右腕の肘をそつと引つ張つて言った。その瞬間、私が「何故そんなことをするのでですか？」私はその場に立ち止つて、教務部長が私の肘を掴んだ手を振り払った。「こんなに引つ張らないで下さい。」私の声は低く鋭かった。教務部長と他の教授たちが面食らつた顔で私を見た。私はそれ以上言いたくなかつたのだが、やはり言つてしまつた。「このように人を引つ張らないで下さい！口で言えばいいのに、何故このように引つ張るのですか！」私は教務部長の腕を振り切つて、さつさと道路に停車していたタクシーをつかまえて乗つた。タクシーのルームミラーを通して、身を固くして立っている教務部長と他の教授たちの姿が見えたが、私はタクシーを止めなかつた。こぶしを握つたまま、タクシーのシートをどんどんと叩くのみであつた。そして家に帰つて、また関節の折れた人形のように椅子にぐつたりとなつて座り込んだ……私は教務部長に「すみません」

というメールを送った。教務部長は直ぐに返事のメールを送ってきた。「伊さんが文筆家であることを、私が忘れていました。私は分かっています。そういうこともあるでしょう。気を使わないで下さい。」

G市で私が住んでいた家は、学校から車で二〇分ほど行った所にある国道沿いのアパートで、築後二五年以上が経っていた。大小二つの部屋があつてリビングがなく、全世帯が同じ形の十三坪の広さで作られた廊下式のアパートだった。市境近くにあつてバスも一時間に一便しかなく、教育施設や商業施設が整っていないので、アパートの時価は他の所から比べると驚くほど安かった。だからアパート全体で百五十戸のうち空き家が三十戸以上という話であつた。実際にアパートの正門横にある平屋の小さな商店街を除くと、他に建物はなかった。この小さな商店街の向かい側は丘陵で、その丘陵の向こう側にビニールハウス団地と工業団地がある。アパートの住人たちのうち老人の数が圧倒的に多く、駐車場には古い軽トラックやタクシー、オートバイなどが主に駐車していた。

私はそのアパートを借りて一人暮らしをし、妻や子供はソウルで生活している。G市に単身赴任で来て以来ずっとそういう生活で、いつの間にか八年が過ぎた。二・三週間に一回、週末にソウルに上京して妻や子供に会い、フランチャイズのバイキング店や蟹料理専門店などで外食し、それから日曜日の午後に妻が作ってくれた惣菜類や下着、ビタミン剤などを手に持ってG市の古

くてもみすばらしいアパートに戻るというスケジュールは、原因不明の無力症になってからも欠かさなかった。G市からソウルに上京する高速バスの中では周囲の人に腹を立てまいと心の中でずつと独り言をつぶやき、またG市に戻る高速バスの中でも周囲の人に声を出さないように自分の心の中で腹を立てた。その時はこぶしを握ってバスの座席の肘掛をどんと叩くほど腹を立てているのである。

私はなぜ関係ない人たちに何度も腹を立てるのか？G市の小さなアパートの机の前に座って私は何度もそんなことを考え、そうすると堪らずアパート団地の正面横の小さな商店街にあるビアホールに出かけ、酒を飲む日々が増えていくのであった。ビアホールの女店主は、私が行くたびにこちらが言わなくても五百ccの生ビール一杯と焼酎一瓶を出してきて、そこに更に千ccの空のビールジョッキを出してくれる。私は千ccのジョッキにビールを注ぎ、焼酎割りにして飲む。一人で飲むとほろ酔いになって誰にも腹を立てることがなくなり、家に帰ってパソコンのスイッチを点けずに寝入ることができた。私がああ奇妙な男と出会ったのは、正にそんな日々のある一日のことだったのである。

酔いで体がふらつきながらトイレに行つて戻つてくると、ビアホールの窓際のテーブルにいたことのない男が一人座っていた。八年間住んできたためか、私はアパートに住む大部分の人を知っていた。名前や職業までは分からないが、顔はみんな見覚えがあった。私はそのビアホールで

前職が区庁職員という六〇代半ばの団地自治会長と一緒に酒を飲んだことがあり、アパート団地の管理所長や警備会社社長とはいつても目で挨拶を交わしている。ビアホールの右側にあるスーパ―、素敵なマート、社長とはピーチパラソルの下に座ってタバコを分け合って吸ったこともあり、イチゴのビニールハウス団地で働く四〇二号の男とはビアホール左側の美容室、ラン・ヘアセンス、で一緒に頭を刈ったこともあった。彼らはみんな私に親切で、無理な頼みをすることもなく、私を「教授」と呼んでくれた。

だからその男がアパートの住民でないことは、確実であった。私は席に座り、ビアホールの女店主に向って声を出さずに口ぶりで「誰？」と尋ねたが、彼女は両肩を軽く一回上げて知らないと言った。無言で答えただけであった。私はまたジョッキに入ったビールを飲みながら、男の後ろ姿と窓に映った男の顔を時々ぞき見た。パーマをしているのか元々縮れ毛なのかどうか分からないもじやもじや頭とぶくつと飛び出ている頬骨、それに今の季節に似合わない黒のスーツ姿であった。頭が際立って大きく見えたが、よく見るとそれは肩がひどく狭く曲がっているからであった。ビアホールの照明のせいなのか、それとも私が酔っているせいなのか分からないが、背中を見せて静かに生ビールを飲んでいる男は、ちよつとぼやけて見えた。こんな表現を使うのは何だと思いが……男を見ながら私の頭の中に浮かび上がるイメージは「綿ぼこり」だった。長い間掃除をせず、部屋の片隅に髪の毛と一緒に丸くなった「綿ぼこり」、糸を今にも吐き出しそうな「綿ぼこり」。私はそのイメージがちよつと変に思えた。それよりも何故人が人に見えないで、ガラス窓に重ね

るパネルのような物体に、あるいは力なく飛び舞う雪片のように見えるのか？あの男の何がそんなことを思い浮かべさせるのか？

ともかくも私はまたうつむいて、残った酒を飲み干した。しばらくして精算をし、ビアホールの外に出た。ビアホールの女店主がちよつと心配になったが、特に危険はないように見えた。カード伝票にサインをしながらそつと見た男の顔は、なぜか怖気づいていること自体が表情になった顔。何かある対象を怖がっているのではなく、最初から怖気づいていること自体が表情になった顔。だからかも知れないが、私はビアホールの外に出た瞬間、すぐに男の顔を忘れ、その男の足元に置かれていた大きなリュックサックにも気付かなかつた。そして後になって私がその男の胸倉を掴み振り回して怒るようになるなんてことは、その時は全く予想できないことだった。もつとも、私がそれをどう予想できたというのか。飛び舞う雪片を掴んで腹を立てることになる、そんなことを誰が予想できたというのか。

これが私とクオン・チャンスン氏との最初の出会いであった。

*

次の日の午前、私は車で出勤する際にまたその男に出会った。アパート団地正門の出入り口横

のバス停にいる人たちが一斉に道路の向こう側の丘陵の裾にある鉄条網の方に顔を向けて立っているのが見えた。正門の警備員も外に出て、腕組みをしたままその方向に顔を向けていた。「何だ？」私は車の速度をゆつくり落とし、車の窓を開けた。暑い七月のむんむんとする空気が車の中に流れ込んだ。工場団地から出てくる生臭い飼料の臭いも一緒に混じって入って来た。

丘陵の裾にある空き地の前には松の木が二本あるのだが、その木を柱にしてブルーシートが屋根のように掛けられていた。そしてその下に、一人の男がござを敷いて静かに座っている。男は字を書いた紙二枚を合板に貼って持ち、一枚は文字が小さ過ぎてよく見えなかったが、もう一枚の方は明瞭に読むことができた。

— **〇三棟五〇二号のキム・ソクマン氏は私が入金したお金七百万ウォンを返して下さい！** —

赤のマジックペンで大きく書かれたその文字を読み、私はその男の顔をもう一度見た。明らかに昨日の晩にビアホールで見たあの男に間違いなかった。もじやもじやの髪の毛も黒のスーツもそのままだった。男は人々に向って張り紙を高く持ち上げることもしせず、アパートの方も見ないまま、ただ静かに頭をうなだれていた。ござの端には、その男のものと思われる藍色の靴一足が揃えて置かれていた。

私は車の窓を閉め、また車を動かした。正門の警備員が私の車を見るとすぐに挨拶をし、私もぺこりと頭を下げた。「恥をかかせようと来た人なんだなあ」私はハンドルを回しながら、こう思

った。「何だ、だったら昨日の晩からあそこで、あんなことをしていたということか？五〇二号？五〇二号には誰が住んでいるのか？あんなことをして効果があるのか？そんなことより直接行って談判すべきだろうに」私は速度を上げながらそう考えたが、直ぐにその日に作成して準備せねばならない書類や学科別就職率資料などを思い出した。七百万ウォンであれ千七百万ウォンであれ、他人同士で起きたことだ。私が口出しする程のことでもなく、また口出しできることでもなかった。「誰だか知らない人が恥を一度かいただけ。そうこうしているうちに、直ぐに止めるだろう」私はそのように考えた。私は学校に着いてから、インターネットで死んだ子供の父親が断食を始めたというニュースと、教育部で大学の構造改革のロードマップを発表したというニュースを読み、教務課と人材開発院のチーム長たちと電話で長話をした。そんなことをしているうちにいつの間にか昼食時間となり、自然と朝に見たあの男のことなんか忘れてしまった。

しかし「そうこうしているうちに、直ぐに止めるだろう」と思っていた男は、私の予想とは違つて何日も何日もその場にずつと座り続けた。その間にブルーシート屋根の端にカーテンのような薄いビニールが四面に取り付けられ、ごきの上には新しい発泡スチロールの板二枚が敷かれた。夜になればビニールを下ろし、発砲スチロールの上に寝袋を広げて寝るようだった。そしてまた朝になればビニールをくるくると巻き上げた後、合板に貼った張り紙を自分の膝の前に立てた。男は相変わらず何も言わず、アパート団地の中に入って来ることもなく、アパートに入る人をつ

かまえて言葉をかけることもなかった。彼はただ静かにそこに座っているだけだった。

その何日かの間に、私は、素敵なマート、社長から、その男の事情についても少し詳しく聞いた。「それはだね、可哀そうな事情があったのだよ。」素敵なマート、社長は私をピーチパラソルの椅子に座らせ、ペットボトルの蓋を開けながら話を続けた。「あの人は子供の時に両親と別れて、苦勞した生活をしたようなだけだ。ああ、ちよつと前までは仁川にある何とかという洗車場で仕事をしていたと言っていたねえ。ところが、あの人の母親だという人が何ヶ月か前に急に訪ねて来て、自分が借金したのでちよつと助けてくれと言って、銀行の口座番号を書いて置いていったそうさ。聞いてみたら、この母親が街の金融屋から借りたようなんだ……どじよう汁店の厨房で働いていたとか何とか言っていたが。とにかくそこで働いていて、関節炎のために辞めて、あまり物を考えずに金融屋から借りたようさ。最初に二百万ウォン借りたのが直ぐに四百万ウォンになり、六百万ウォンになり、七百万ウォンになったそうなんだ。そうしたら怖くなつて、それで仕方なく長い間行き来がなかつた息子を訪ねて行ったそうなんだ……息子も直ぐにはお金をかせなかつたようさ。今すぐそれだけのお金を用意するのも難かつたようだけれど、なに、見なくても分かるよねえ。まあ、母親がいなくて恨んだということはなかつただろうよ。息子に何もしてやったことになかつた母親なのだが、いきなりやつて来て助けてくれとはねえ……とにかくその人は何ヶ月か後に、その口座にお金を振り込んでやったのだよ。何も言わず七百

万ウオン全部。」

、素敵なマート、社長は、その時ちよつとしゃべるのを止めた。いつの間にか、ラン・ヘアセンス、の女社長が私たちの横に来て席に着いていたのである。セミが鳴き、ハエが多い夏の夜だった。

「ところで、ここからがもつと可哀そうな話なのだが：：その間にあの人の母親も、その借金を返したというのだよ。住んでいた借家の保証金を使い、あちこち知り合いからも少しづつ融通してもらつて：：その借金を返してちよつとしてから亡くなったというんだ。あの人は言わないけれど、おそらく自分で命を絶つたようなのだ：：だから結果的に金融屋にお金が二回入つたということになる。あの人、ちよつと前に遅ればせながらも母親の葬式をして、直ぐにここにやつて来たよだねえ。」

「それをあの男がみんな話したのですか？」
私は道路向かい側の男をそつと見ながら、、素敵なマート、社長に尋ねた。

「いや、大体そうだったみたいだ。ここに住んでいるお年寄りたちがあの前を行き来する時に言葉をかけてみたら、大体そんな事情を話したというよ。」

「ところで、キム・ソクマンって誰なの？五〇二号？五〇二号にそんな人が住んでいるの？」
ラン・ヘアセンス、女社長が尋ねた。

「いるって、誰がいるの？うちのアパートに金融屋をしている人は、どこにもいないよ。ああ、

乳母車を押ししているおばあさん、いたじゃない：：そのおばあさんの息子だというよ。その息子が住所をこつちに移したみたいだ。」

乳母車のお祖母さんといえば、私も知っているおばあさんだった。明け方新聞が来る時間になれば、いつも決まって乳母車を押しして工業団地に紙くずを拾いに行くおばあさん、眉から耳にかけて染みが広がっているおばあさん、乳母車がなくては十分に歩くことも出来ないおばあさん。

「いや、だったらそのおばあさんを通して連絡すればいいんじゃないの？いくら金融屋でも、金が二回も入っていたことまで、知らん顔はできないんじゃないの？」

ラン・ヘアセンス、女社長の言葉に、素敵なマート、社長はタバコを取り出して口にくわえながら答えた。

「アパートの管理所長が言うには、おばあさんも息子の連絡先を知らないってよ。だいたい四年ぐらい前の正月にちよつと顔を出してからは全く顔を見せてなかったというよ。まあ、刑務所に行ったという話もあるし、警察に追われているという話もあるし：：アイゴ、だから可哀相ということはないですね。あの人も気の毒で、乳母車のおばあさんも気の毒で：：このおばあさん、あの人がああいうことを始めてからは、外に出ることもなくなつたよ。紙くずを拾わなかつたら、ちゃんと暮らせないおばあさんが：：。」

私は、素敵なマート、社長の話を聞いても、特に反応しなかつた。タバコのフィルターをとんとんとピーチパラソルのテーブルの上で叩き、ミネラルウォーターと歯磨きをレジ袋に入れて家

に帰り、ラーメンを作つて食べ、足の爪を切り、ソウルにいる子供たちと電話で短い会話をした。非常に暑い天気で、エアコンを点けようかとも思ったが、そのままシャワーを浴びた。シャワーをしながら、私はあの男のことを考えた。「今は上着も脱いでいることだろう。もう全部分かったからには、そんなものは脱いで楽にしているだろう」私は頭にシャンプーを泡立てながら、そのようにつぶやいた。「男は母親の代わりに七百万ウォンを送るのに、どれだけ時間を使ったのか？ お金を送った時、なぜ直ぐに母親に連絡しなかったのか？」私は、「男がお金よりも自分に湧き起こった罪責感をどうすることもできずにあんなことをしているのだ」と、そして「それは仕方のないことだ」と、更に「あんなことをして時間を過ごすしかないのだ」と思った。

シャワーを終えた後、私はまたパソコンのファイルを開けてコンピューターデスクに座ったが、三〇分もしないうちにスリッパを履いてピアホールに出かけた。例の男はそこに座っていたが、私はなるべくそっちの方を見ないようにした。パチパチ。素敵なマート、の庇の下に置かれた捕虫器用蛍光灯から騒がしい音が聞こえてきた。空梅雨の夏の夜は暑いだけであった。

*

七月が過ぎ八月中旬になつても、男はずつとその場所に座り続けた。その間にスーツを脱ぎ、白色のトレーナーやベージュ色の七分丈パンツに着替えたことぐらいが、違つていと言えば違

っている点だった。男は時おりイチゴのビニールハウス団地近くにある湧き水場まで水を汲みに行き、時おりアパート団地に背を向けて座り、ガスコンロで飯やラーメンを作って食べていた。そうしてからまたアパート団地に向って張り紙板を持って座った。男の顔はちよつと浅黒くなり、だからなのか頬骨はさらに飛び出てきたように見えた。

光復節（八月十五日の解放記念日）の次の日だったか、朝出てみると、男もテントも消えてなくなっていた。それで私は、「あ、今すべてが終わったんだなあ。男も疲れ果てたんだろなあ」と思った。しかし午後にはタバコを買いに出かけてみると、またテントが張られて、男が座っているのが目に入った。「奴さん、就職したってよ。」、素敵なマート・社長があごで男の方を指しながら言った。「この団地に住んでいる警備会社の社長さんが、あつちのポソン洞にあるアパートの地下駐車を掃除する仕事を紹介してやったみたいだ。月水金の午前だけ働き、一ヶ月に五〇万ウオンもらおうという条件で。」私は「そうですか？よかったですね。」と短く答えた。「ところが笑わせるのは、奴さん、出勤するたびにあのテントをみんな畳んで出かけ、戻って来たらまたテントを張って、そんなことをしているんだねえ。引越しては帰り、また引越しては帰って来る人みたいだ。」私は黙つてうなずいた。「発泡スチロールの板は？あれは手に持つて行けないはずなんだけど。」「それは警備のおじさんに預けているようだよ。あのおじさん、キムチを何回か持つて来てやつていたよ。」

ある時ビアホールに出かけると、アパート団地自治会長や警備会社社長、管理所長と一緒に座っているその男を見た。彼らは私がビアホールに入ってくるのを見るや挨拶をして、「教授もこつちで一緒に座りなさいよ。」と勧めた。私はぺこりと頭を下げて、そのまま彼らの後ろのテーブルに座った。ビアホールの女店主は直ぐに生ビールと焼酎を持って来た。

「クオン・スンチャンさん、私たちが他に意図があつてそうするのは絶対にありません。だから誤解なされないようお願いします。ここにいる人はみんな同じ気持ちなんです。」

団地自治会長の太くて低い声は、薄い木の板の仕切りを越えて、鮮明に聞こえてきた。だから私はその男の名前がクオン・スンチャンだということを初めて知った。

「クオン・スンチャンさんの事情が気の毒なことも、よく知っております。気持ちもよく分かります。しかし、こんなことで解決することではないでしょうか？」

「もうご存知でしょうが、五〇二号にはその人は住んでおりません。気の毒なおばあさん一人が住んでおられるだけです。」

団地自治会長と警備会社社長、管理所長がこう言ったのだが、男は黙りこくって返事しなかった。ビアホールの女店主が無言劇の俳優のように、男の方を指差して胸をぽんぽんと叩くジェスチャーをしたので、私はにやりと一回笑った。

、あの管理所長がクオン・スンチャン氏を褒めちぎっていたわよ。誠実で掃除も非常によくやっているってね。

「クオン・スンチャンさんのために私たちが何か都合悪いということは、何もありません。クオン・スンチャンさんから被害を被ったことは何もありませんから、これは純粹にクオン・スンチャンさん個人のために言つてあげているんですよ。」

団地自治会長はそう言つて更に男に「自分が責任を持つて、キム・ソクマンという人が現れたら必ず連絡してあげます。それでも安心できないなら、私の連絡先を書いてくれてもいいです。だからあそこであんなことをせず、住む所を探すとか、仁川に帰るとかするのはどうでしょうか。」と言つた。

「ここに住んでいる人たちは、みんな暮らし向きが世間並みで苦しいのですが……それでも善良な人たちです。あつちの一〇二棟二〇三号でおいさんが一人暮らしをしておられるのですが、あなたの話を聞いて本当にそうなら当分の間あなたに一部屋貸してやるからそこに住んでもいい、それに若い人でもあんな所で一人寝ていたら大変なことが起きるものだから必ず伝えてくれとおっしゃっています。ここに住んでいる人たちはみんな同じ気持ちなんだからと。」

私は酒を飲みながら、もうこれ以上座つてはいけなない気持ちになつた。その男のためではなく、団地自治会長や管理所長、警備会社社長らのためであつた。財布を用意して立ち上がったが、管理所長が私を見て声をかけた。

「教授も何か一言、言つてあげてくださいよ。」

私は戸惑つたようにテーブルの前に立つたまま、「私が何を……」と言いかげながら、頭の後ろ

を搔いた。その時、ほんのわずかの瞬間、そのクオン・スンチャンという男と目が合った。彼は罪人なのに自分の犯した罪が何なのか分からない人間のように二つの目をぱちくり開けて、管理所長の横に座っていた。私は本当に言うべき言葉がなかった。私の言うことよりも、団地自治会長や管理所長、警備会社社長の言葉の方が彼にもっと助けになるのだ。私も彼を気の毒だと思うが、そうだからといってアパートの一部屋を貸してやるとか、仕事を見つけてやる程の誠意は持っていない。可哀そうと思うが、煩わしい。それがその時の私の正直な気持ちだった。私は彼らにもう一度頭を下げ、ビアホールを出た。

*

書かなくてもいいし、書いてもそれだけのことでしかない彼とのエピソードを書いておこう：
：新学期が始まっていくらかも経っていない時に、クオン・スンチャン氏と私がたった二人でビアホールに座って酒を飲んだことが、たった一回あった。

学生たちと一杯飲んだ後タクシーに乗って家に帰って来たのだが、アパート団地の正門に入ろうとする私を、彼が呼び止めた。

「あのう、教授。」

彼は裸足に運動靴を履いて、道路を走って渡って来た。いつも座っている姿だけを見ていたの

でよく分からなかったが、彼は右足がちよつとびっこを引いていた。手にA4用紙二枚を持って
いた。

「すみませんが：：これ、ちよつと見て頂くと有難いのですが：：。」

男は私に紙を差し出して言った。男の声は細い針金が響くように弱々しく、体からはすえた臭
いがした。その紙には、男が張り紙に書こうとする内容が書かれていた。「二〇一四年六月三日、
ハナ銀行のクオン・スンチャンの口座から七百万ウォンを国民銀行のキム・ソクマン名義の口座
に送金し、六月二五日にクオン・スンチャンの母親であるキム・ポクスの農協口座から一金七
百万ウォンが国民銀行のキム・ソクマンの口座にもう一回入金：：。」

私は紙に書かれた文章を街灯の明かりに頼って読んでいたが途中で止めて、男に尋ねた。

「ところで、これを何故私に：：？」

「あのう：：綴りが正しいか、ちよつと見て頂ければ、と思つて：：これ、間違いのないよう
に、正確にしなければならぬのです：：。」

私は何も言わずに男の顔を見てから、彼を連れてピアホールに入った。そしてカバンから赤の
サインペンを取り出し、男の文章を一つ一つ直してやった。酔いがちよつと回っていたが、私は
精神を集中した。

文章をみんな直してから、男と焼酎割りの生ビールを一杯ずつ分けて飲んだ。私は団地自治会
長らが言っていたような言葉を男にはかけなかった。私たちは黙って酒を飲むだけだった。私は

頭がぼうつとして、男とはそれ以上話ができなかった。ただ男と一緒にビアホールを出てからアパート団地の正門入り口で立ち止まって、こんな会話をした記憶だけがぼんやりと残っている。

「足、しびれているの？」

私は、体をふらつかせている男に尋ねた。

「えっ？ はい。」

「その足、ずっと座っていて、しびれているの？」

「ああ、これですか。そうではないです……元々、ちよつとしびれているんです。子供の時に怪我しましてね。」

「時々、そうなるの？」

「そう……。子供の時に裏山で遊んでいて、落ちたはずみに……。その時、骨がおかしくなったのですが、父が信じてくれなかったのです。どんなに痛いと言っても……。そうして二ヶ月経ったら、このようになったのです。」

「お母さんは？お母さんにも言ってみれば……。」

「その時は、母が亡くなった時だったから……。」

「え！何だつて！今、お母さんの借金を返してもらおうと、このようなことをしているのではなかったの？」

「そうです……新しいお母さん……。」

*

秋夕（お盆のこと）連休が過ぎ、十月に差しかかる時になっても、男はずっとその場を守って座り続けた。

まだ暑さは残っているが、朝晩は寒気が感じられ、室温を維持するためにオンドルを焚き、温かいコーヒーを手に持つ日々が増えていく、そんな季節がまたやって来たのである。午後には黄砂混じりの風が吹くことがたびたびで、そんな日になれば男はテントの正面や裏面にビニールを垂らして、その下端に重い石を並べ置いた。風にはビニールが、寒気には発泡スチロールが防いでくれるというが、街路樹が葉を落として見通しがよくなり、秋になって天が高くなるほどに、あのテントを見る私の気持ちに逆に重くなっていくのであった。熱いスープを飲む時や温かいシヤワーをする時、考えまいとしてもあの男のことが自然と思ひ浮かんだ。さらに子供の時に飼っていた猫が家出した記憶が今更のように思い出し、軍隊時代に酷寒期訓練をした時に見た天の川や凍り付いた川の水などが、ごちゃごちゃと筋道なしに思い出すのであった。自分の肋骨の上に小石の塊が転がり回っている、そんな気分だった。

そんな気分は私だけではなかったようで、十月の最初の週にアパートのエレベーター横の掲示板に特別募金をするという案内文が貼り出された。気の毒な五〇二号のおばあさんと団地正門の

向かい側にいる男のために、小さな誠意を集めましょうという趣旨の案内文であった。団地自治会長の名前で作成されたその案内文には、毎年歳末に実施してきた恵まれない方々助け合い募金をこれに代えるという内容も記されていた。案内文を貼り出して四日後には自治会班長会議を開くというお知らせがその横に貼られ、それから二日後には各班長が各家を回って募金を集めた。一万ウォンずつとしていたが、私は十万ウォンを出した。班長は私のお金を受け取りながら、実は自分も五万ウォン出したと苦々しそうに言った。

すぐにも集まるようだった七百万ウォンは、実際には簡単に集まらなかつた。素敵なマートに立ち寄るたびに、私は社長から今どれくらい集まってどれくらい足りないという話だけでなく、「湧き水場によく行く四つ角の薬局の薬剤師が百万ウォンをさつと出したとか、区会議員と区庁職員たちもどれくらい出したとか言っていたよ。自治会長があちこち飛び回って頑張っているよ。うだ。」という話も聞くことができたのだが……だからかも知れないが、以前のようにビアホールに気楽に出入りできなくなつた。一人酒を飲んでいたら何か間違いを犯しているような気分になり、自分が非情な人間になつてしまったような気まずい思いが頭の中を駆け巡るのであつた。私はビアホールに行こうとする気持ちを押さえて家で缶ビールを飲み、もし家にビールがなければ何も飲まずに済ませた。酒を飲まずに時を過ごすことが出来るようになったのである。

酒が減つたおかげなのか分からないが、私は少しずつ原稿を書いてファイルするようになった。

しかし無力症は相変わらずで、思わずごぶしを握りしめることは一度や二度ではなかったが、それでもそのたびに深呼吸して息をいっばいに吐き出し、原稿を書いてみようとする努力した。何か話 생각이浮かぶたびに、それが言葉になるうがなるまいが付箋に書き殴り、ひとまずコンピュータデスクの後ろの壁面に魚の鱗のように一杯くつ付けた。学校での生活も、家族に見せてやる姿も、特に変わったことはない。小説さえ書けば、あるいは付箋の文章と文章を繋ぐことさえできたら、すべてが無事にいられるのであった。自ら進んでそのようにやって、突破するのみだった。

何が間違っているのかも分からなかったが、私はずっと自分を守ろうと全力を尽くした。

*

七百万ウォンが全部集まったのは、十一月初旬のことだった。

募金を渡す前日、私は、素敵なマート、にラーメンを買いに行ったところ、そこに自治会長と何人かの人集まっているのを見た。

「最後になって五〇二号のおばあさん、四七万ウォンを出したってよ。それで七百万ウォンぐらい集まったというよ。」

、素敵なマート、社長は、私に耳打ちでそのように伝えてくれた。

「さあ、だったらこのお金をどのようにして渡してあげましょうか？」

自治会長が集まった人をざっと見回しながら言った。私はラーメンを選んでいる振りをして、窓越しにクオン・スンチャン氏をそっと見た。最初にここに来た時に見た黒のスーツの上に、薄緑のダウンジャケットを新しく引っかけた彼は、自分の横腹を握りこぶしでとんとんと叩きながらその場所にそのまま座っていた。そして大きなあくびをしたり、張り紙板を真っ直ぐに置き直していた。

「私を知っている地方新聞記者が一人います。明日、呼んでみましょうか？」

誰かがそう言うと、直ぐに自治会長が手を横に振った。

「丁重にやりましょう、丁重に。これは正確に言うと、あの男を助けるのではなく、五〇二号のおばあさんを私たちが助けてあげるのです。そしてその男はもらうべきお金を受け取るのです。」

自治会長がこう言うと、誰も異議を唱えなかった。私も彼の言うことが正しいと思った。

「それでもあの男と馴染みになって……何もしてませんが……何ヶ月間、毎日毎日顔を見て、挨拶して……。」

「それに初霜が降りるより前に事がこのように片付いて、どれ程よかったことか。あのようにして冬を迎えると、もう大変ですよ。」

「五〇二号のおばあさんは外に出ないようだから、私たちが直接渡すことにします。はい。何か他に何か手順を踏む必要なことはありませんか？」

私はここまで聞いて、素敵なマートを出た。ちようど家に帰ろうとしたその時、私は足を止めて振り返り、その男をもう一度見た。男は張り紙板を両腕で抱き締めて、うとうとと居眠りしていた。この男はどこに行くことになるのか？仁川に戻るのだろうか。私は仁川にある彼の居所がその時まで残っていることを願った。ここまでは、私が男のためにできる全てであった。

後でピアホールの女店主から聞いた話によると、その次の日にあの男は、つまりクオン・スンチャン氏の行動は、五万ウォン紙幣で七百万ウォンを封筒に入れて準備したアパート住民たちを当惑させた。

自治会長はさらに旅費の足しにと二〇万ウォンが入った封筒を持って行き、新聞記者こそ呼ばなかったが、素敵なマート、社長がスマートホンでその過程を動画で記録することとし、住民たちは男と握手し拍手して、さらに男のテント撤去作業をみんなで手伝うはずだったのだが……。

しかし男は、住民たちの全ての善意を拒否した。

「私はこのお金を受け取ることができません。」

男はこう言つて、また張り紙板を持っていつもの場所に座った。

「いや、クオン・スンチャンさん。これ、私たちが何か他意があるのじゃないのです。五〇二号のおばあさんに代わつてお渡しするものなのです。これには五〇二号のおばあさんのお金も入っています。」

自治会長がそのように言ったが、男は揺るがなかった。

「私は元々あのおばあさんからお金を受け取るつもりはありません。私はキム・ソクマン氏に会おうと思つて来たのです。その人に直接会つて、事を解決しようとする……。」

集まつていた住民たちに溜め息が漏れ、何度もきつい言葉が出たが、男は意を曲げなかった。彼は何事もなかったかのように、そのまま発泡スチロール板に上がり、付いた砂を手のひらで払つた。

「もう行きましよう。人の誠意を、何とまあ、そのように無視しては……。」

誰かがそう叫び、住民たちは一人二人とまた団地の正門に戻つて行つた。それが私が伝え聞いたその日の出来事の全てだった。

アパート団地では、彼が七百万ウォンにさらに利子をもらおうとしているのだという噂が飛び交い始めた。

*

そんなことがあつてから、自治会長は私を二回訪ねて来た。区庁の係長で定年退職したこの男性は、一昨年妻をガンで亡くした人だった。息子が二人いるが、今は二人ともソウルで会社員をしていると聞いた。

自治会長は私が書齋に使っている部屋の真ん中であぐらを組んで座り、しばらくの間親指と人差し指で自分の眉間を押し、黙っていた。私は彼が口を開くまで何も言わないで、待った。

「私たちは何を間違えたのでしょうか？」

彼が中低音の声で、私に尋ねた。私は「そうではなく、会長が苦勞なさっているのは私もよく知っています。」と答えた。実際に私はそう考えていた。私は彼の善意を疑っておらず、だから彼が感じた苦々しい思いや虚脱感を理解することができた。どんなに考えてみても、自治会長は間違っていない、それで正しい。

「みんなの認識が段々悪くなっています。元々そうでなくても、人間なのでから……。」

私は自治会長の言っていることに、黙って頷いた。

「イ教授、ひよつとして他のお考えがありますか？」

自治会長は私にそう尋ねた。

「私は何の……私も同じですよ。まあ……。」

「天気も寒くなりますが……そうこうしているうちに何か事件・事故が起きないか、心配です。」

「はい、そうですね……。」

自治会長はしばらく間を置いた。私はその姿から、彼が私を訪ねて来た本当の理由を推測した。すると自治会長はその推測の通りの言葉を私に言ったのである。

「あのう、イ教授。教授がクオン・スンチャン氏に一度会ってみるのはどうでしょうか？まだ

お金も私のところにあるので……。」

「私が、ですか？私がおうなんて、また、どうして……。」

「それでも、やれるところまでやってみなければ。イ教授も説得し、私も説得し、管理所長も会って見て、まあ、そうするしかないでしょう？」

私はしばらく何も言わずに、指先で部屋の床に意味のない絵を描いた。私は、自治会長も私と同じような無力症になっているのではないかと、ちよつとそんなことを考えた。

私は彼に「努力しましょう。」と言つて、話を終えた。

自治会長の言葉のせいかどうか分からないが、私は退勤時に彼に会いに行かねばならないという負担感に悩まされた。車を駐車場に入れて真つ直ぐに家に帰つてはいけないし、私がクオン・スンチャンに会いに行くために足をどこに向けようとしているのかを住民らがどこかで見張っているのだという想像が、ずっと私について回つた。実際に私は車を駐車して直ぐに家に帰らず、何回かアパート正門まで歩いた。しかし、そこから前に出ることはできなかった。彼を説得する自信もなかったが、なぜ私が彼を説得しようを努力せねばならないのか、その理由が分からないことに悩まされ、そんなことに神経を使っているとまた無力感に襲われて腹が立つのであった。私はアパート正門でしばらくの間こぶしを握つたまま立ち、そして理由もなく上体を前後に動かしながら座っている彼を見てから、何も言わずに家に帰ることを繰り返した。

それから……私はまたビアホールに出かけるようになった。何のためらいもなく。

*

十二月に入ってから、彼のテントは区庁職員たちによって三回撤去された。誰かが通報したようだと、素敵なマート、社長が言った。

「私はただ黙って見ているだけでしたよ。」

区庁職員たちがハサミで松の木に繋げている紐を切り、床に敷かれていた発泡スチロール板を半分に折ってトラックに積み込んだ時も、彼はおとなしく片隅で立っているだけだったという。区庁職員がいなくなった後も、しばらく張り紙板を持ち黙って歩道の段に座っていた彼は、二日間、三日間、場所を空けることもあった。そうしてまた現われてテントを張り、発泡スチロールを敷き、張り紙板を持つて座った。素敵なマート、社長が言うには、月水金の午前だけやっていた地下駐車場の掃除の仕事も半月前に辞めたという。

三回目の撤去が受けてから、彼はもうテントを張らなかつた。その代わり、どこかで釣り用の折り畳み椅子を探し出してきて、何も言わずにそこに座った。張り紙板はいつものように彼の膝の前に立てられていた。そして夜は……段ボール箱を幾つか繋げて長方形を作り、そこに入って寝た。床には何を敷いているのか分からなかつたが、彼は明らかにその中に入って寝ていた。棺

桶のような段ボール箱の中に……床には段ボールが敷かれているのだろう……その上に寝袋を敷いて寝ているのだろう……アパートの住民みんなが息を殺して、彼の行動を一つ一つのぞき見ている様子だったが、お互いそんな話はしなかった。またそんな話をする気配もなかった。

G市に初雪が降った日、私はビアホールで酒を飲んでいて、衝動的にドアを開けて外に出て道路を渡った。雪のせいなのか周囲は明るく、街灯はかすんで見えた。雪が積もった丘陵と空の境界線は鮮明で、丘陵の向こうに遠く工業団地の煙突から白い煙が立ち上るのが目に入った。宙に舞い散る雪片、地面に積もる雪片、私は雪を踏んで彼の前に歩み寄った。薄緑のダウンジャケットに帽子を被り、綿の手袋をはめた両手で張り紙板を持っている男。釣り用の折り畳み椅子に座っている彼の後ろには、色んな大きさの段ボールが折り畳んで整然と積まれていた。そしてすぐ横には空の業務用食用油缶が置かれていたが、何かを燃やしたようで、ひどく焦げていた。男は肩を縮めていて、ちらつと私を見た。

「お母さんのために、そうしているの？」

私はジャンパーのポケットに手をつ突っ込んだまま、言った。

「お母さんがあなたのせいで亡くなったから、そうしているのかと聞いているのだが。」
男は目を逸らして、うなだれた。

「違います……母がなぜ私のせいで死ぬ……。」

男がここまで言った時、私はジャンパーのポケットから手を出して、彼の胸倉をつかんだ。

「違うとは、何が違うんだ！そうじゃないのか！お前がお金を出すのが遅くなって母親がああなつたと考えているんじゃないのか！」

胸倉をつかまれた男は、その場で中腰になって立ち上がり、その拍子に折り畳み椅子が後ろに転がった。

「違います……お金が六百万ウォンしかなくて……七百万ウォン作るにはあと二ヶ月働かなくてはならなくて……そうなつたのです……。」

男がそこまで言った時、私は彼の胸倉を掴んでいた手を離した。私は男の言っていることを聞きもしなかった。

「関係のない人を困らせるな！関係のない人を困らせるなど言ってるだろ！」

私は、後ずさりする彼に向かってそう言って、また道路を渡ってアパートの正門の方に歩いて行った。ビアホールの女店主がドアを開けて立ち、黙って私とクオン・スンチャン氏を見ていた。

そこまでであった。

*

彼はその日から三日間、その場所に座っていた。

四日目の午前、「G市ホームレス 憩いの場」という文字が書かれた乗用車がアパート正門の向

かい側に止まったと思つたら、屈強な青年二人が降りた。二人は何も言わずにクオン・スンチャンの腕を両側から掴んで引き起こし、立たせた。それで終わりだった。

「ぶるぶる震えながら、引つ張られていったんですよ。何の抵抗もなく。」

私は、素敵なマート、社長の言うことを黙って聞くだけであつた。私は誰がその二人を呼んだのか、大体の推測がついた。しかしそんな推測は一言も言わなかつた。ただただ、素敵なマート、のガラス窓を通して、道路の向こう側の、彼が五ヶ月近く座つていた場所だけをぼんやりと見ていた。そこには釣り用折り畳み椅子や張り紙板、きれいに積まれた段ボールなどは跡形もなく、火にあぶられた業務用食用油缶だけが寂しく転がつていた。

*

私はもとより彼の話を書くつもりはなかつた。いや、初めは書くつもりだったのだが、途中で止めて書かないことにしていた。彼について到底書く自信がなかつたためだった。ところが、私は今ここで彼の話を書いた。それは先々週の金曜日、アパート団地駐車場で出会つたある人のためだった。

学校から帰つて来て車を駐車場に入れ、私の住む一〇二号棟の出入り口に歩いて行こうとした

時、見慣れない黒色の乗用車一台が私の横を通り過ぎた。このアパートでは見たことのない外車だった。私はちよつと立ち止まり、その車が駐車するのを見守った。車から出てきた人は、私と同じ年くらいの男だったが、きちきちのジーパンに黒の革ジャケットの下に赤い縞模様のTシャツを身に着けていたが、腹部の肥満で腹がそのまま出っ張っている。手にはショッピングバッグを持っていた。男は何も言わずに立っている私をちらつと見て、そのまま一〇三号棟に出入り口の方に歩いて行った。私は彼の後ろ姿を見て、誰を訪ねて来たのか分らないが、こんなアパートにあんな車に乗ってやって来る人もいるんだなあと思いつつ、そのまま一〇二号棟の方に歩いて行った。そして何歩も歩かないうちに、私はまた振り返って彼が入って行った一〇三号棟を見た。ちようど五階にエレベーターが止まり、廊下の照明が一つ二つと自動点灯した。私はその照明をじつと見ながら、しばらくその場所に立っていた。

そして今ここで、その話を書き始めた。私たちはなぜ関係のない人々に腹を立てるのかについて。